

# 大学入学共通テストに関する高等学校教員アンケート

河合塾

2018/2/8

河合塾では、昨年(2017)の11月下旬から12月中旬にかけて、進路指導に携わる高等学校の先生を対象に入試動向説明会を実施した。そのうち全国47会場で、2020年度より導入される「大学入学共通テスト」(以下、「共通テスト」)に対するアンケート調査(文末※参照)を行った。

## ■共通テスト「英語」と民間資格・検定試験の両方に賛成2割、反対4割

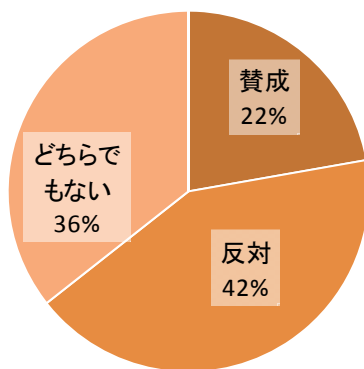
新テストにおける英語では、4技能を評価するために民間の資格・検定試験を活用する方向性が示されている。ただし、移行期間として、共通テストが導入される2020年度から2023年度までは、共通テスト「英語」も併せて実施されることとなっている。その利用方法は各大学に委ねられており、共通テスト「英語」と民間の資格・検定試験のいずれか、または両方を利用することが可能とされている。

これについて、国公立大学協会(以下、「国大協」)は昨年11月、国立大の一般選抜では全受験生に両方を課す方針を表明した。〈グラフ〉は、こうした国大協の方針に対する賛否を伺った結果である。

### 〈グラフ〉高等学校教員アンケート

#### Q. 「新テスト『英語』に関する国大協方針に対してどう感じるか」

(国大協方針：一般選抜受験生に共通テスト「英語」・民間資格検定試験の両方を課す)



n=1,575

回答は、「賛成」を「反対」が上回った。その理由としては、両方が必須であると受験生・学校側にとって大きな負担であるという意見が最も多かった。いずれか一方のみの利用でよいとする意見のなかでは、民間の資格・検定試験は地域や経済的事情から受検機会が公平ではないと懸念する声や、民間の資格・検定試験で4技能を評価できるため2技能のみを評価する共通テストは不要だとするものなどがみられた。

一方で「賛成」の理由として、一律同じ対応であれば受験生にとっては志望校変更をしやすといった意見が挙げられた。また、民間の資格・検定試験のみでは不安だが、全員が同一の試験問題を受験する共通テストは従来のノウハウも

あり、併せて利用することで一定の公平性が担保されるのではないかと、併用自体に賛成する声もみられた。

ただし、上記のような賛成・反対意見の両方を挙げ、「どちらでもない」とした回答も3割以上を占めた。また、新テストについてまだ理解をしていないといった回答も散見された。今年4月に入学する新高1生から新テストに移行するが、文部科学省や各大学の対応方針発表の遅れが、高等学校現場での周知の遅れにつながっているようだ。

## ■国語・数学での記述式導入について

同アンケートでは、共通テスト「国語」「数学」で導入される記述式問題についての意見を自由記述で求めた。思考力・表現力を測るにはよいといった好意的な意見が寄せられた一方、採点基準などに不安を感じる声もみられた。国語については、日常生活に結びついた題材を扱った良問という声がある一方、学問を行う大学への入り口で学術的な内容から離れた試験を課してよいのかといった否定的な意見もあった。

### ※アンケート概要

実施期間：2017年11月～12月

対象：高等学校教員 回答者数：1,963名(文中のグラフはこのうち未回答者を除いて集計)